

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アッカド語のVentiveについて(I)
Author(s)	小脇, 光男
Citation	ニダバ , 8 : 32 - 39
Issue Date	1979-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046388
Right	
Relation	



アッカド語の Votive について⁽¹⁾(I)

小 脇 光 男

アッカド語の形態素 $-am/-nim$ に関する考察は、既に故 Landsberger 教授によってなされ、同教授はこの形態素に“Votive”なる名称を与えた。⁽²⁾その後この名称に対し、いくつか反論が出されながらも、その多くは実証的な見解というよりも、むしろ名称論に偏るきらいがあるが、今日では“Votive”なる文法術語とその文法的機能は一般に受け容れられている。⁽³⁾

しかしながら、いくつかの反論の中にも窺える如く、形態素 $-am/-nim$ が必ずしも Votive としての機能を有していない例も多く認められることは事実であり、今一度綿密な考察が必要と思われる。

そこで本小論では、これまでの諸説をも考慮しつつ、この問題に検討を加え、若干の問題点を指摘してみたい。

I

この Votive としての機能を有すると思われる $-am/-nim$ ⁽⁴⁾ は、既に Old Akkadian (OAkk.) 期の資料中に認められるのであるが、これが付される動詞は極めて限られており、ほとんど動詞 *alakum* “to go, to come” に集中していると言ってよい。その他 *wabalum* “to bring” 等、ごく少数の運動を表わす動詞に付されている例が散見されるけれど、在証される用例が僅少のために、OAkk. 期に於いて、 $-am/-nim$ がどのような動詞に付き得たのかは、全体的に実証することが困難であり、推測の域を出ない。しかしながら、最も多く在証される動詞 *alakum* の諸例から判断すると、少なくともこの動詞に関する限り、既に OAkk. 期に於いて、形態素 $-am/-nim$ の有無が Votive / Non-Votive の対立を表わす文法カテゴリーとして存在していたことは、疑問の余地がないものと思われる。⁽⁵⁾

一方、後節で問題とすることになるが、Old Babylonian (OB) 期に見られる如く、形態素 $-am/-nim$ に、話者への具体的、物理的な方向を明確に指向する所謂 Votive としての機能から逸脱した用法が、既に OAkk. 期に存在したかどうか、又運動を表わす動詞以外にも、この形態素が付されることがあったかどうか、ということは一つの問題であろう。⁽⁶⁾ 筆者の知る限りは、次の二例にのみ、この様な用例が指摘されるのだが、にわかに結論を下すことは出来ない。

en-ma PN₁ a-na PN's a-zé-ḥa-me (= / ašīḥam-me /) da-ni-iš da-ni-iš

“thus says PN to PN's: 'I laughed (or rejoiced?) very heartily'” (MAD III p. 241

S'7H siāḥum の項を参照)

mi-nu-um aš-da-na-ba-ra-ma(=/aštanapparam-ma/) la du-ša-ba-lam

“how is it that I write (to you) continuously and you do not send me (the silver).”

(MAD III p.281 ŠPR šapārum の項を参照)

いずれにしても、限られた動詞についてはあるけれど、形態素-am/-nim が Votive としての文法的機能を有していたことは十分に認められ、この意味では、Votive なる名称は一応妥当と思われる。

II

OB 期に於いては、資料の豊富さもあって、形態素-am/-nim の接辞された動詞の用例が多数見出される。これらの諸例の中には、勿論 Votive として解される-am/-nim も多いけれど、一方では Votive 本来の機能から外れているものも又多数認められる。そこで以下 OB の書簡集を資料とし、⁽⁷⁾ 主として後者の場合に関して検討を試みたい。

なお、資料の性格上、šapārum “(手紙を)書き送る”⁽⁸⁾ tarādum “(人を)送る、派遣する”，šūbulum(く wabālum の Šaphel 形) “運ばせる，送る”等の動詞が頻出するので、本稿では紙幅の都合もあり、引用例は上記の三動詞⁽⁹⁾に限ることとする。

動作主体とその動作が指向される方向，又は対象の移動方向という観点から用例を整理すると、次のようになる。

A. 動作主体が 1 人称

i) 方向が 2 人称

書簡集に多数見られる例に、次のものがある。

i-na ṭup-pi-ja a-na be-li-ja ki-a-am aš-pu-ra-am

“私の手紙で、我が主にかくの如く書き送った。” VS 16, 186, 4 etc.

ṭe4-e-em... a-na še-er be-li-ja aš-pu-ra-am

“報告を……我が主のもとに書き送った。” ARM II 40, 17 etc.

このように a-na (še-er) be-li-ja aš-pu-ra-am という用例は、多少のバリエーションはあるけれど、数多くの類例が認められる。ARM III 37, 30; 40, 21; ibid V 61, 3; AbB II 151, 6; 179, 7 (最後の 2 例は a-na a-bi-ja aš-pu-ra-am “我が父に書き送った。”) など参照。

更に、

ma-ti-ma a-na be-li-ja ka-ta/ u-ul aš-pu-ra-am i-na-an-na ṭup-pi a-na be-li-ja ka-ta uš-ta-bi-lam

“Niemals habe ich an dich, meinen Herrn, geschrieben, jetzt schicke ich meinen Brief an dich, meinen Herrn.” AbB II 86, 6-8; 83, 10.

ṭe4-ma-am wa-ar-ki-e-(e)m/a-ša-am-me-ma/a-na še-ri-ka/a-(š)a-ap-pa-ra-am

“Les nouvelles ultérieures que j'apprendrais, je te les enverrai.” ARM I. 121,

18; *ibid.* II 122, 11 etc.

動詞 *šubulum. ʔarādum* も *šapārum* と同様な文脈の中で現われる。

ʔup-pí an-ni-e-em a-na še-er be-lí-ja ú-ša-bi-lam

“私のこの手紙を、我が主のもとに運ばせた(送った)。” ARM II 37, 21; *ibid.* III 5, 40; 11, 6; 14, 6; 48, 7; 57, 7; 71, 6; 80, 8; 81, 11; *ibid.* V 78, 9 (*uš-ta-bi-lam*).

ʔup-pa-tim a-na a-bi-ni nu-uš-ta-bi-lam

“Hiermit schicken wir Briefen an unsere Vater.”

LIH. Nr. 48, 13; ARM II 57, 16 (*a-na še-er a-bi-ni*); AbB II 82, 23 (*a-na ma-ḥar a-bi-ja*) etc.

ka-ni-ik l ma-na KÛ·BABBAR ša PN/ a-na ma-aḥ-ri-ka uš-ta-bi-lam

“Hiermit schicke ich dir Urkunde über eine Miene Silber des PN.” AbB II 171, 16.

i-na-an(-na)[amtam]/ a-na qa-at 「PN」/ ap-qí-dam-ma/ a-na še-er be-lí-ja/ aṭ-ru-dam

“Mainten[ant], j'ai confié [la servante] à la main de 「PN」 et je l'ai dépêchée à mon seigneur.” ARM V 82, 15; 1, 9; 82, 21; ARM XIII 38, 24.

ERIM *et-lu-tim ša ni-iṭ-ru-dam/ ar-hi-iš li-iṭ-ru-du-ni-iš-šu-nu-ti-ma*

“Man soll auch die jungen Soldaten, die wir zu dir geschickt haben, schnell zu mir zurückschicken.” VS 16, 186, 6’.

i-na-an-na PN SIPA/ a-na ma-ḥar a-ḥi-ja ka-ta/ aṭ-ṭar-dam

“牧者 PN を、汝、我が兄の前に使わした。”

VS 16, 200 (= AbB VI 217) 20; LIH 1, 13 etc.

a-nu-um-ma PN a-na še-ri-ka aṭ-ṭar-dam

“私は汝のもとに PN を使わした。”

LIH 2, 11; 11, 17; 12, 13; 19, 8; AbB II 91, 13; VS 16, 137, 15 etc. 又 AbB II 98, 65; VS 16, 199, 13 (*a-na ma-aḥ-ri-ka*).

その他

a-na šu-ul-mi-ka aš-pu-ra-am

“Deines Wohlergehens wegen habe ich dir geschrieben.”

VS 16, 1. 9; 4, 6’; 64, 8; 66, 8; 67, 8; 124, 9; 198, 8; 201, 9; 202, 9; 203, 8; AbB II 81, 9; 85, 9; 92, 8; 又 AbB II 82, 8; 15, 8 では *a-na šu-lum a-bi-ja* となっている。

以上に列挙した諸例に見られる如く,⁽¹⁰⁾ *-am/-nim* に Ventive 本来の機能を認めることは困難である。Ventive なる名称に反対する見解は、反証例が具体的に示されていないけれど、恐らくこう

した理由に起因しているものと理解する。注記した如く(注3), -am/-nim が単に方向性を示しているにすぎないとする energicus (あるいは terminative) 説と, 具体的・物理的な方向性を示す Ventive が, 更に心理的方向性に拡張して用いられるようになったとする ethical dative 説とに二分されるわけであるが, 更に綿密な検討が必要と思われる。

これと関連して, 本節で挙げた諸例中には, 前置詞 a-na (又は a-na še-er) によって lexical に方向性が具体的に示されながら, 更に何らかの方向性を表示していると考えられる -am/-nim が付されている用例が認められる。これらの例に於いて, 前置詞 a-na (še-er) によって示される方向性が, 更に -am/-nim によって redundant に表現されていると見做すべきなのか, あるいは -am/-nim にその他の機能を認めるべきなのか, にわかには決定し難い。⁽¹⁾ 後考を待たねばならない。

以下, 上述の如き問題点を含んでいるが, 続けて用例を挙げることにする。

ii) 方向が3人称

a-nu-um-ma a-na Ḥa-ab-du-Ma-lik/aš-tap-ram

“Dès à present, j'ai déjà écrit à H.”

ARM XIII 51, 22 ; AbB II 128, 6 ; ibid IV 79, 13 ; 160, 23' ; 140, 5 (aš-pu-ra-am) ; ARM IV 17, 10 (aš-pu-ra-(a)m) etc.

be-lí a-na PN ù PN₂ li-iš-pur-am-ma... / a-na PN ù PN₂ / ú-da-an-ni-nam-ma / aš-tap-ra-am

“Que mon seigneur à PN et PN₂ écrive……, à PN et PN₂ j'écris fortement.”

RA 21, No 19, 14.

Sin-i-din-nam a-na A-ad-da-a(a-tà)-ar-ra-dam-ma

“J'envoi S. à A.” ARM I 109. 4 etc.

i-na-an-na ša a-ḥa-ti iš-pu-ra-am mi-na-a-am i-šū-ma a-na a-ḥa-ti-ja ú-ša-ab-ba-lam

“Jetzt aber, was dasjenige (betrifft), worüber meine Schwester mir schrieb, was habe ich und könnte ich meiner Schwester schicken?” AS 16, 1. 33.

その他

ù qa-tam-ma tup-pa-am a-na Ba-aḥ-di-Li-im (u) š-ta-bi-lam

“En outre, j'envoie également. une tablette à B.”

ARM XIII 50, 13 ; 又 ARM I 109. 14 etc.

a-nu-um-ma tup-pa-am a-na še-er šarrim uš-ta-bi-lam tup-pa-am ša-a-tu šarram šu-úš-me-ma...

“A présent, j'a envoyé une tablette au roi. Cette tablette, fais-(la)

entendre au roi…”

ARM XIII 50,6 ; ARM II 132,12 etc.

B. 動作主体が2人称

i) 方向が3人称

aš-šum awīli meš^š Ha-ni-(i) ša i-na ha-la-aš GN e-li-i-im wa-aš-bu
a-na šarrim ta-aš-pu-ra-am

“ Au sujet des Hané(ens) qui se trouvent dans le district supérieur de GN(=Idamaraz), tu as écrit au roi. ” ARM V 51,8.

u^u-um ta-na-aš-šu-ú 2 awīli qal(u-tim) a-na še-er Iš-me^d-Da-gan
šu-up-ra-am

“ Le jour où tu partira, 2 hommes rap(ides) envoie à Išme-Dagan. ” ARM II 10,5:
ša-ba-am ša-a-ti (a-n) a še-er a-ḫi-ka ṭu-ur-dam

“ その軍隊を汝の兄のもとに送れ。 ”

ARM I 39,22' ; ibid. II 10,9' etc.

C. 動作主体が3人称

動作主体が3人称の場合、使用し得る用例は極めて僅少であり、ここでは扱わないことにする。

最後に、動作主体が2人称, 3人称で、運動の方向が1人称に向っている場合、多くの用例に於いては、-am/-nimの機能を1人称単数与格の人称接尾辞として容易に理解され得るのであるが、次の如き諸例に認められる-am/-nimは、どのように考えるべきであろうか。

ù aš-šum a-wa-tim mi-im-ma a-na še-ri-ja ši-tap-pa-ra-am

“ En outre, au sujet de n'importe quelle chose, écris-moi régulièrement. ”

ARM V 5,13.

šum-ma e-pi-is-ku-nu-ši-im

šu-a-ti ù be-el a-wa-ti-šu a-na še-ri-ni ṭu-ur-da-nim

“ Wenn es zu schwierig für euch ist, schickt ihn und seine prozeßgegner zu uns. ”

VS 16,142,16.

a-nu-um-ma tup-pi PN ša… a-na še-ri-ja ú-ša-bi-lam…

“ Or çà, la tablette de PN, qu'il m'a envoyée … ” ARM V 78,7.

既に触れる機会のあった問題と併せて、明らかにしなければならない点である。

III

以上に列挙した諸例に見られる如く、明瞭にVentiveとしての機能を有する-am/-nimの存在が認められながらも、Ventiveなる概念で包括し難い用法も又在証されることが指摘できる。本稿では問題を提起したにとどめ、これらの未解決の問題解明は、更に綿密な文脈整理と理解の上、後日の攻究に待つこと

にしたい。

注

(1) 本小論は、第8回西日本言語学会(1978・9・16)に於いて口頭発表したものを骨子として、加筆文章化したものである。

(2) B. Landsberger, Der «Ventiv» des Akkadischen, ZANF I (1929) pp. 113-123.

同教授は、主としてOld Babylonianの資料をもとに、起源的には1人称単数与格の人称接尾辞である-am/-nimが、運動を表わす動詞に付され、その動詞の運動方向が話者の方に指向される機能を有することに注目し Ventivなる名称を与えた。

例えば動詞 alākumはそれ自体一定の運動方向を持たず、“to go”, “to come”の両義をその中に含んでいる。すなわち、動詞 alākumは“to go”, “to come”のいずれか一方の運動方向には中立であって、意味上対立する動詞を有しない。ただ形態素-am/-nimの有無によってのみ、動詞 alākumの指向する方向がいずれかに決定される。

つまり、 illik(unmarked)……Non-Ventive “he went”

illik-am(marked)……Ventive “he came”

と理解される。

CAD, AHwに於いても、この動詞に関する限り、用例はVentiveとNon-Ventiveに分類されて記載されている。

(3) Ventiveの問題に言及している主な論文等は次の通りである。

V. Christian, «Energicus» oder «Ventiv» im Akkadischen? ZANF 2 (1930) pp.71-73. ここでは、形態素-am/-nimのVentiveとしての機能は後に発達したものであり、全体としては energicusとして理解すべきであるという見解が出されている。Cf. von Sodenは、Akkadisch, in Lingua Semitica; Presente e Futuro, Roma (1961) p.43で、-am/-nimは他のセム諸語に認められる energicusとは無関係であろうと述べている。

A. Goetze, The -t- form of the Old Babylonian Verb, in JAOS 56 (1936) p. 298, p. 324. Ventiveなる名称に対し、terminativeなる名称を提唱し、-am/-nimに関する若干の考察がなされている。

I. J. Gelb, Sequential reconstruction of Proto-Akkadian (=AS18), Chicago (1969) pp.136. Allativeなる名称を用い、-am/-nimにethical dativeとしての機能も認めている。

その他に、

W. von Soden, Grundriss der akkadischen Grammatik, Roma (1952) §82.

J. Aro, Studien zur mittelbabylonischen Grammatik (=Studia Orientalia XX), Helsinki (1955) p. 87.

A. Lancellotti, Grammatica della Lingua Accadica, Jerusalem (1962) §70.

Th. Jacobsen, *Ittallak niāti*, in JNES 19 [1960] 101-116.

—————, *The Akkadian Ablative Accusative*, JNES 22 [1963] 18-29.

R. Follet, S. J., *Mélangés de l'université Saint Joseph XXXI* [1954] pp. 89-93
(=Review of von Soden's GAG).

Driver and Miles, *The Babylonian Laws Vol. II*, Oxford [1968] p. 148 n. 41, p. 156 n. 46.

など参照。

- (4) *-am/-nim* は動詞語幹が子音又は母音(-ū/-ā) に終る場合の異形態と考えられる。但し 2 人称単数 f に於いては単に *-m* である。これは、例えば *tašprim* < **tašpurī-am* と考えられている。

所で、Ventive としての *-am/-nim* は、1 人称単数与格の人称接尾辞からその機能が発達したものと一般には考えられているが、この与格の人称接尾辞はセム諸語の中であって、ただアッカド語にのみ見られるという事実は興味ある問題である。共通セム語的には、動詞に接辞される 1 人称単数の人称接尾辞は */-ni/* の要素を含む *-nim* の方であって、今一方の *-am* については、その起源が不明である。これについては、別に綿密な攻究が必要と思われる。Cf. S. Moscati ed., *An Introduction to the Comparative Grammar to the Semitic Languages* [1969] Wiesbaden, pp. 106-107.

いずれにしても、機能的には *-am* と *-nim* の間には差異が認められない。

- (5) このような機能を有する形態素は、他のセム諸語には知られないものであり、アッカド語に特有なものと考えられる。しかし、明確な文法カテゴリーとしては存在しないが、類似した現象がヘブライ語等に認められるのは興味深い。例えばヘブライ語に於いては、前置詞 1-*to, for* に人称接尾辞の付されたものが動詞と共に起る (e. g. *lekh lekha* "go, get thee away", *šubū lakhem* "return ye" etc.)。この文法現象については一定した見解は無い (Gesenius は "pleonastic ethical dative" としている) けれど、アッカド語の形態素 *-am/-nim* と機能的に平行した点があるのではないかと想像される。ただアッカド語では、主語の人称・性・数に関わりなく一様に *-am/-nim* が用いられるのに対し、ヘブライ語では、前置詞 1- に付される人称接尾辞は、常に主語の人称・性・数に一致する。詳しくは、Gesenius' *Hebrew Grammar*, Oxford [1910] p. 381 (§ 119S) を参照。簡単なが Gesenius とは異なる見解は、Joüon, *Grammaire de l'hébreu Biblique*, Rome [1923] p. 405 (§ 133 d) に見られる。更に、シリア語に於けるヘブライ語との類似した表現は、Th. Nöldeke, *Compendious Syriac Grammar*, London [1904] p. 177 (§ 224) 参照。
- (6) これらの用法が *-am/-nim* の Ventive 性から更に発展したものと仮定しても、既に OAkk. 期に存在していたであろうことは十分に推測できるし、又存在していたとしても不思議ではないと思われる。只 OAkk. の中で *-am/-nim* の機能、用法の推移を見ることはやや困難である。
- (7) 使用した資料とその略称は次の通り。

Kraus & Frankena, *Altbabylonische Briefe. Heft I~VI*, Leiden [1964~1974] (=AbBI~VI)。但し、AbBII=LIH, AbBIV=RA 23 (Thureau-Dangin), AbBVI=VS 16.

Dossin, Kupper, Archives royales de Mari I ~ VI (1950 ~ 52), XIII (1964) (=ARM I ~ VI, XIII).

- (8) 動詞 $\check{s}ap\bar{a}rum$ がしばしば $-am/-nim$ を伴って現われることについては, AHW $\check{s}ap\bar{a}ru(m)$ の項, J. Aro, Glossar zu den mittelbabylonischen Briefen Helsinki (1957), $\check{s}ap\bar{a}ru$ の項に, 既に指摘されている。
- (9) これらの動詞は, 対象の運動方向によって条件づけられており, $al\bar{a}kum$ “to come” などの動詞とは, やや趣を異にする。運動を表わす動詞に関する興味ある研究は, ドイツ語と英語のみを扱ったものではあるが E. Leisi, Der Wortinhalt, Heidelberg (1961) (邦訳「意味と構造」鈴木孝夫訳, 研究社〔昭和47年〕pp. 130) がある。アッカド語の運動の動詞に関しても, このような意味論的考慮が必要と思われる。
- (10) ここで注意すべきことは, 類似した文脈にもかかわらず, $-am/-nim$ を伴わない例も在証されることである。

e.g. ... a(-na b)e-lí-ja ki-a-am aš-pu-ur. ARM XIII. 144, 5.

a-na še-er be-lí-ja as-pu-ur ARM II 24, 14'; 26, 14'; 29, 14. etc.

awīlam ša-a-tu a-na še-er be-lí-ja a-ṭà-ra-ad ARM VI 19, 20 etc.

wa-ar-ki ṭup-pí-im an-ni-im ša a-na be-lí-ja uš-ta-bi-lu

“A la suite de cette tablette... que je fais porter à mon seigneur.” ARM II 71, 20,

又同一の書簡中に, $-am$ を伴うものと伴わないものの両方が認められる例もある。

a-nu-um-ma tup-pa-a-tim a-na Zi-im-ri-Li-im uš-ta-bi-lam

ṭe₄-mu-um šu-ú ša ḥa-ma-ṭi-im a-na še-er Zi-im-ri-Li-im

šū-bi-il

“Or çà, j'ai fait porter à Z. des tablettes; cette information est urgente.”

Ces tablettes, fais (-les) porter à Z.” ARM VI 53, 4 ~ 10; ibid. 51, 11 ~ 20' etc.

しかしながら, これがどのような criterion に基づくものか疑問が残る。

- (11) 本稿では扱わないが, $ašpurakkum$, $aṭṭardakkum$ (それぞれ $*ašpur-am-kum$, $*aṭṭard-am-kum$) の如く, 動詞語幹 $-am(-nim)-$ dative suffix に認められる $-am/-nim$ も, これと平行して考察しなければならないけれど, 別の機会に譲ることにする。
- (12) この一例から看取されることは, $\check{t}u-ur-da-nim$ に認められる $-nim$ が, 少なくとも dative suffix としての $-nim$ ではあり得ないということである。もし具体的に dative を表わそうとするならば, $\check{t}urd\bar{a}-niašim$ とならなければならないだろう。